
人間シンドローム

元木悠世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間シンドローム

【Nコード】

N4204B

【作者名】

元木悠世

【あらすじ】

施設育ちの17歳の女子高生が死と向き合うそんなお話

Prologue

人は生まれるときに一つの運命さだめを受けられる

死という現実

それは全員が持つもの、決して曲げることの出来ない事実

遅かれ、早かれ、人は死に直面する

そして今このときもどこかで命が失われ続けているだろう

”いじめ” ”内紛” ”戦争” 人はいつたい人をどれくらい死ねばいいのだろうか、いつまで殺し続ければ気が済むのだろうか……

そんなことを知る人などこの世には存在しない

たとえ知っているからと言って何が出来るのだろうか

”いじめ” ”内紛” ”戦争” を止めることが出来るのか？ 防ぐことが出来るのか？

出来るわけもない。第一にこのご時世、自分から巻き込まれる人なんているわけがないだろう

世界は腐ってしまった。終幕への末路をただ突き進む

”自殺” ”犯罪” の絶えなくなった日本

昔は黄金の国と呼ばれていた国も世界最大のスラム国と呼ばれている
そんな時少女は生まれた

生まれたときから施設暮らし

母親は少女を生んだときに死に、その次の少女を施設に置き去りにし父親は失踪した

絶望とも思える状況でも少女は生き続けた

この世界に未来があることをただ信じ続け懸命に生きていた施設で暮らし始めて十七年目の冬

母親の様に思い親しくしていた施設の職員が死んだ

死因は銃殺、心臓を一発打ち抜かれており即死だったと言う彼女は自分が思っていた程強くなっていなかった

ダイヤモンドの様に見せかけたただのガラス細工

心は跡形もなく脆く崩れ去る

数日間、食事も喉を通らず学校も休んだ

何人かが心配して来てくれたが会うことはせず自分の部屋で籠り泣いていた

また数日が経ちやせ細り経つこともままならない足で彼女は立ち上がった

「自殺………しようかな」

その顔に表情はなく、誰に会うこともなく施設の外へ出た

第一話

施設を抜け出した彼女の目に生氣は感じられず、黒ずみ濁っている。黒のジーンパンとダウンジャケットを着ているが寒そうに身体を振るわせる。

今頃……施設は大騒ぎだろうか

閉じ籠り続けていた人が急に消えてしまえば誰もが驚くだろう。そんな状況が不思議と頭に浮かんできく。

なんで……こんなときに……死ぬと決めたのに……

施設を抜け出してから三十分

彼女は再び戻ってきた。所々雨漏りのする古ぼけた建物。

「お姉ちゃんが帰って来た!!」

引き戸の辺りにいる五歳位の少女が彼女を見るなり叫んだ。その声を聞きつけ何人もの人たちが建物の中から出てくる

「紋乃ちゃん!! どこに行ってたの??」

その声は少し涙の所為か潤んでいる様に聞こえた。

黒の長い髪を持つ少女。瀬川紋乃せがわあやのそれが彼女の名前。

浅倉洋子あさくらようこ。五十歳くらいの容姿の今では珍しいブラウンの髪の毛を持つおばさんが彼女に近づいてくる。

「ごめんなさい、ちょっと気分転換に行こうかなと思いましたが掛けてました」

とてもじゃないが死のうとしてましたなんて言えるわけもなく心

の中に押し込む。

「院長先生、良かったじゃないですか紋乃ちゃんがちゃんと帰って来て」

院長先生の後ろから若干若そうな声がした。院長先生から目を離しそつちを見る。

「おかえりなさい」

あさくらかなこ
浅倉加奈子。浅倉洋子の妹として生まれた四十五歳くらいで姉とは違い黒髪のおばさん。

「次からはちゃんと言ってから外には行くのよ?? わかった??」

浅倉加奈子は多少きつめの口調で言う。それがどこか気に入らなかつた。

そんなことわかってると言い放つてやりたかつたが非は自分にあるため言い返せなかつた。

「……わかつ……」

「明日からはちゃんと学校にいきなさいよ」

言葉を遮られ苛つくがなんとか我慢した。浅倉加奈子が自分のことを嫌っていることは知っていた。だから今までお互いに避けていた。が

今日は瀬川が言い返せないというのを良いことにしてやられた気分だった。

浅倉加奈子があたしの大好きだった職員を殺しているのは知っていた。知っていたからといってどうすることもこの国では出来ない。すでに国としての権力が崩壊している。警察という制度も崩壊し名前だけで役に立たない。だからこの国で”犯罪”が増え続けているのだ。もうどうすることも出来ない。以前はアメリカ二度程日本という国を統制しようとして兵隊を派遣したらしいのだが市民の横暴から兵士は虐殺され死人は二千人を超える程だ。それが結果としてアメリカ国民の怒りを買って断念せざる終えなかつた。それ以来どの

国にも日本と関わりを持つとする国は現れず統制しようとも統制しようとも思われなくなった、世界初の見離された国だ。

やはりこの国は腐ってる

そう心で呟くと瀬川は一度抜け出した施設の扉を入った。

第二話

施設の中はいつも通り変わっていない。コンクリートで主に構成されているこの施設はどこか古臭さを残している四階建ての建物だ。けれども住む家のない紋乃が文句を言うわけもなく心の中で押しつぶす。

最近、隣町ではストリートチルドレンが増えてきているらしい。そんな中高校にも通わせてもらい帰る家もある紋乃は良い部類に入るのだろう。

再び自室に戻ったところのことなどなく、しょうがなくベツトに横たわる。が

時計を見れば15:30を回ったところだった。いつもなら昼寝をする時間だが今日はそんな気分ではなかった。

窓を見た。見えるのは一本のイチヨウの木。葉がようやく紅葉をし始めたところでまだ緑の葉が多いがもう少しすれば毎年の様に地面を綺麗な黄葉で埋めてくれるに違いない。子供の頃はそれが毎年の様に楽しみだったのだが、最近では魅力すら感じない。

子供の時の様に何も知らずに生きていけたらどんなに楽だろうと思う。

現実とは違う。忘れてしまいたいと思う記憶ほど忘れることはできない。記憶なんてそんなものだ。

そんなことを考えているうちに虚しくなっていくのがわかった。この虚無感、自分はこの世界に必要なのだろうと思うが、結論はすぐに至る。

きっと広大な世界が自分を必要とする時なんてないだろう。必要とされたって一人で何が出来るのか、何も出来るわけがない。じゃあなぜ自分はこの世界に住み続けているのだろうか

この世界が好きだから?? そんなことはないむしろ嫌いに

入るだろう

好きな人がいるから??
生まれてから十七年恋愛などしたことがない

じゃあなぜ生きている、理由がないのに生きる必要なんてあるのだろうか

疑問は疑問を呼び解決の糸口さえ見せようとはしなかった。

「おねーちゃん!!ごはんだよー」

ドアが開けられその先から光が差し込んできた。気付けば日は暮れ太陽の変わりに月が空を支配していた。

「今日は満月だね」

その言葉に呼びに来た子供は紋乃のそばにすぐやってきて「どれどれー??」と言つて来る。

紋乃は優しく「あれだよ」と指をさして教えてあげた。子供は「きれー」と連呼し、無邪気に喜んでいる。

私はいつからこの笑顔を忘れてしまったんだろうか……

そこでやっぱり昔の様には戻れないと再び痛感させられた。

私は少し知りすぎた。何もかもね

自分で思つたことを自分で笑う。涙が出そうになったが流れる寸前、袖で拭つた。気付けばいつのまにか子供は月を見るのをやめ静かに紋乃の顔をじつと見ていた。その顔は紋乃と同じで神妙な面持ちだけどどこかが違う。そんな気がした。

「おなかすいた……」

そこで「ああ、そうか」と理解した。思えば少しばかり空いてるかもと思つた。子供の目線までしゃがみ言つた。今出来る最大の笑顔と一緒に

「行こうか」

その言葉に元気良く「うん!!」と言うと紋乃の腕をつかみ食堂に連れて行かれた。

第三話

食事を終えた紋乃は自室へ戻ろうと食堂の扉を出ようとしたところで呼び止められた。

声のする方へ身体を向けるとそこには院長（浅倉洋子）が立っていた。何事かと思い近づいてみるとあとで院長室に来て欲しいのとこのだった。どうやらここでは妹の加奈子の目が気になるらしいのだ。なので一言

「わかりました」

といい、微笑んでおいた。

何だろうと思ったのだがそれはすぐにわかることなのであんまり考えずにしていた。

しかしそこで一つの疑問が紋乃の頭を考えさせた。時間を聞くのを忘れていた。すでに食堂から出てしまっていて再び聞きに行くのも億劫おっくうな感じがしたので適当に行けばいいかなと思い、再び自室を指した。

しかし自室には戻ったもののやっぱりすることがなく結局ベットに横たわっていた。意識が段々と薄れていくのがわかったがもう抗うことは出来ず眠りに落ちた。あらが

どれくらいの時間が経ったのだろうかまだ寝惚けている身体を無理矢理起こし時計を見た。

21:00を少し回ったところだった。結局二時間ほど寝ていたのを知った。夜寝れるだろうかと思っている自分に苦笑した。毎回考えることだが結局は寝ている自分がそこにはいるのだ。頭を多少使った所為か幾分目が覚めた気がした。

院長のところへ行かないと思い扉を出ようとしたところで小指をぶつけ蹲った。笑う余裕すらなくただただ痛みに耐えた数十秒間それは苦痛でしかなかった。痛みが引いたときにはもう完全に眠気は覚

めていた。良かったのか悪かったのかわからない。再び歩き出そうと左足を出したときまだ痛みが少し残っている。そこでやっぱり悪かったと思う。

長い廊下を左に曲がったところに院長室がある。少し手前まで来たところで院長室から話し声が聞こえてきた。

それは院長と妹の会話であることが声が聞こえることによってわかる。

「なんで の しとくんで」

良く聞こえないそう思うと知らずに身体を潜めながら扉に近づく自分がいることに苦笑した。なにしてるんだろうと思ったが盗み聞きしてでも聞かないといけないと直感で思った。

「兎にも角にも、なるべく早くにお願いしますよ、姉さん」

なんだ終わりかと多少落胆していたのも束の間院長室から加奈子が出てきた。紋乃を見るなり

「あなた！！ いつからそこにッ」

と怒鳴りつけてきた。加奈子という人が嫌っている紋乃の言い訳などを聞くわけもないことを知っているので黙って説教を聞いていた。しかし今日は違っていた。黙っていることにも「なんとか言いなさいよ！！」と言われ対応に困った。つくづく理不尽な女だと思った。言えば怒られ黙ってれば怒られなら私はどうすれば良いのだ。あなたは私に何を望むのだそんなことを考えていると院長が「それくらいにしなさい」とそれを止めに入ってくれた。止めてくれなければどれくらいあの理不尽な説教を聞かされているのかと考えるだけでも頭が痛くなった。

通路から加奈子がいなくなったのを院長は確認すると部屋に招き入れてくれた。元々はそのために来たのだが説教の所為でそのことが紋乃の頭からすっかり抜け落ちていた。

院長室に入り見回すと一年前に入ったときと特に変化はなかった。どこかのオフィスの造りのその部屋は必要仕事に最低限以外の物を

置いていなかった。院長はその部屋にもう一つある扉に歩いていく。その扉は紋乃にとって未知なる世界だった。院長が扉を開け中に入ると紋乃もその後ろを着いて行きその部屋に入った。

赤を基調としたその部屋は異彩を放っていたが紋乃はそんなにも嫌いじゃなかった。が

多少目が痛いのを感じた。

「そこら辺に座って」

院長が急に話をしたため辺りを見回していた紋乃は前へと向き直し壁に背を預け床に座り院長の話を聞く体制に入る。床が冷たいと感じたがそれを我慢した。

「明日は学校に行けそう？」

その言葉に紋乃はどうしようと思ったがこれ以上心配をかけるわけにもいかないので小さく頷いた。「そう」と一言だけ言われ心の奥の感情が読み取られたような錯覚に陥る。身体が熱くなるのを感じた。その後二人は沈黙した。段々と落ち着いてきて紋乃にも頭を回転させる余裕が出来た。何のために私をここへ呼んだのだろうかと思っているとそれを見透かしたかのように院長は再び話題を切り出してきた。

「あなたの父親がお見えになったのよ……」

「えっ……」

思いもかけなかったその言葉に思わず言葉をもらしてしまふ。なぜ今更になって父親が現れたのだろうか全く意図が掴めない。言葉を失っている紋乃を見るも院長は話を続けた。

「あなたを引き取りに来たらしいの……けどあなたが丁度いいときでね、仕方なく帰っていったわ。けど多分明日も来るって言うてた……」

最後の方は言葉が小さくなって言ったので良く聞こえなかった。院長はタンスを見て立ち上がった。扉を開けそこから出てきたのは一つの赤いアルバムだった。表紙にはカタカナで『アヤノ』と書いてあり院長が無作為に開けたページには紋乃の写真が所狭しときつ

ちり貼られていた。よく見れば初めて見る写真ばかりだったが自分の小さい頃の写真はやはり懐かしいとつくづく思う。

「かわいいでしょ？」

と問うてきた。自分自身ではなかなか答えを出しにくい。反応しないのもあれなので院長の顔を見て微笑んだ。それに対し微笑み返してくれたことが嬉しかった。何気ない時間がとても長く感じとても心地よくもあつた。しかし本題はそこではない。なぜ父親が急に私を引き取りに来たのかだった。

「あなたがもし父親の方に行くのならこれをあなたにあげます……」表情は真剣だが、その心の奥にある寂しさを紋乃は感じてしまった。私はどうすればいいのだろう。父親、院長、父親、院長。

二つの言葉が紋乃の頭を駆け巡り困惑させる。かけがえのない父親に会ってみたいとは思ったものの一緒に住みたいとは思わなかった。紋乃は決めた。

「そのアルバムは洋子先生がもう少し持っていてくれますか？」

「わかったわ」

「お願いします」

考えることもなく言葉を理解したのか院長は手に持っていたアルバムを再びタンスを開けしまった。これでよかったのだろうかと思った。自分はやっぱり間違った判断をしてしまったのではないかと。「じゃあ、話は終わり。今日は早く寝なさいね」

しかしその気持ちはすぐに取り払われた。院長の微笑が一瞬でそんな疑問を吹き飛ばす。そう紋乃は確信した。自分は間違っていないと。

……その時は。

第四話

院長室の扉を出ると廊下は暗かった。どこまでも続く闇に吸い込まれそうになりそうになる。吸い込まれてしまったら戻ってこれるだろうかとそんなことを思う。実際に吸い込まれることなどあるわけがない。しかし、紋乃の心にそれが少しだけ不安となって残っていたのも事実だった。不安を抱えながらも自室を目指しゆっくりと歩を進める。途中、窓に水滴が付いているのを見て、いつの間に降っていたのだろうかと思う。もし雨が降っていたら自分の前に立ちはいだかつている闇はより一層怖いものになっていただろう。ポツ

「雨だ……」

無意識に呟いていた。雨の音が強くなっていくのに比例していくのかのように紋乃の心も重くなっていく。知らずのうちに足を止めて窓の奥にある景色を見つめていた。無限に広がる入り口を。

前へ向き返すと窓からの薄明るく照らされたところに人の気配があった。しかし顔までははっきりと見ることは出来ず誰かはわからない。

「誰？」

聞くが反応はなかった。その代わりその人影が近づいてくるに連れて床のきしむ音が廊下に響く。足を動かそうとも自分の足ではなにかのように言うことを聞かず紋乃はその場から逃げ出すことが出来なかった。なぜ。なぜ。なぜ。

動いてよと祈った。願った。頼んだ。紋乃の不安を尻目に近づいてくる人影の全貌が段々と明かされていく。足が竦むとはこのことだろうと思わずとも思わされている自分がいた。身長は紋乃より二十センチくらい高いだろうか。体格はがっちりとしていて目はやや吊り目で一瞬たりとも目を離そうとはしなかった。

「こない……」

こないでよと言いたかったが声はその途中で消えてしまった。この二人のいる場所が不安で支配されているそんな感じだった。雨は風が強くなったのか窓に叩きつけられ雫となって窓を滑り落ちていく。

「瀬川紋乃」

自分の名前が呼ばれ俯き加減だった顔が再びその人影の方を見た。よく見れば無精ひげを生やしていたことに気付いたが紋乃にとってそれどころではなかった。

「な、なんなのよ、いつたい」

震えている声が紋乃の心境そのものだった。得体の知れない人が自分の目の前にいる。一歩間違えば殺されかねない。先ほどまで死のうと思っていたのが馬鹿らしく思えた。やはり人間は死に直面するともっと生きたいと思うことを痛感した。

まだ私は死にたくない

それが紋乃の心を大きく突き動かした。出来る限り息を吸い込み腹に力を入れた。

「しっ………」

自分のではない右手が紋乃の口を塞いだ。

「兎に角落ち着いて、君の父親だ」

予想などしていなかった、その発言に再び声を上げそうになったが以前口は塞がれている為に大声にはならなかった。なぜ父親がここにいるのかがまったくわからず意図も掴むことが出来なかった。

第五話

なぜこんなところに父親と名乗る人がいるんか紋乃は理解できなかった。十七年間も姿を現さなかった父親が目の前にいる。そう考えると怒りがふつふつ湧いてくるのがわかった。

「どうして今更」

「仕方がなかったんだ…」

十七年間行方を眩ますことが仕方がないで片付けられるわけがない。むしろその言葉が紋乃の怒りを増幅させる。沸き起こる怒りそれは殺意の直前までに達しようとしていた。

「理由はあるんだ」

それを察しなだめるかのように父親は言った。立場が逆転しているのが口調ではつきりとわかる。強気で言う紋乃。なだめる父親。普通の家庭ではありえないことだろう。

「理由は？」

と紋乃は言い放った。そこから感じるのやはり怒りのみ、他の感情は一切入っていない。強くなって行く雨が現在は紋乃の心を表している気がする。先ほどまではただ不安を増幅させる存在でしかなかったのに。

「母さんのことを調べていたんだ」

何を言っているんだこの人は紋乃は思う。ほんと今更の話だと思つた。十七年前に私を生んで死んでいったという母親。母親が死んでいると院長から聞かされたときはそれほど驚きはなかった。自分を生んでくれた以外はそこら辺にいる他人となんら変わりないくらの存在、こんな状況をもし境遇する人がその人はやはり悲しむのだろうか、そう思うと全く感情など起こらない自分に嫌気が差した。しかし一つの疑問が紋乃の中で浮かんた。

「母さんの名前は何て言うの？」

「瀬川希 せがわのぞみ 希望の希という漢字を使うんだ。良い名前だろう？」

「そう、そうだね」

その声に感情は混じっていない。良く言えば純白、悪く言えば無感情。この状況は無感情の方がしっくりくるのは実際に紋乃自身もそう思っているからだろう。父親はその紋乃の姿に落胆していた。しかし気を取り直し話し続ける。

「で、本題だが。この施設に浅倉加奈子がいるだろうか？」

全く予想していなかった名前だけに紋乃は驚いた。母親と浅倉加奈子の何の関係があるのだろうか、なぜ父親は浅倉加奈子のことを調べていたのだろうか。

「お前は気にならないのか？ 母親の死の真相を」

父親の顔は真剣だが紋乃には全く伝わってこなかった。

「いや、これといって別に……」

「母親の死と君の親しくしていた職員の死が関係あるとしてもか？」
その瞬間、紋乃の瞳が変わった。その瞳にたじろいだ父親がいた。死を感じた父親がいた。澄んだ黒曜石の色の瞳その瞳は”殺意””狂気””憎悪”を感じる。誰もが見た瞬間に死を感じるだろう。それがたとえ十七歳の高校生が言ったとしても怖いものは怖いのだろう。

紋乃は父親を一心に見て歩を進める。背筋が凍り父親は全く動けなかった。今まで一定間距離で話していた二人は段々と距離が縮まっていく。紋乃は目の前に来るが如く、父親を一瞥し

「名前は？」と聞いた。

「瀬川圭吾」

「そう、覚えておく。偽名だろうけど」と避け再び自室へと戻っていた。

その場に紋乃がいなくなるなりへなへと倒れこんだんだ。偽名だということもあっさりバレてしまい圭吾は今までに感じたことのない恐怖はどんなに不利な状況で諦め死を覚悟した時の比ではないと感じた。

あれが俺の担当なのか……

そう思うと少しだけ先が不安になった。俺で大丈夫なのかと思っ
た。ここにいても仕方ないと思い今日は家に帰ろうと玄関を目指し
た。

玄関を開けると雨はまだ強く降っていた。もしかしたらさっきよ
りも強いかもしれない。傘を持っていない圭吾は仕方なく濡れて帰
る。「そうだ」と思いついたように顔を上げ闇空を見た後すぐにそ
の場にしゃがんだ。

次の瞬間、圭吾の周りを黒い薄い膜のようなものが包んだ。一瞬
の出来事だったが次に出てきた圭吾の姿は男子にしては長髪の微青
の髪の毛の十八歳くらいの少年だった。

徐にポケットから携帯電話を出すと片手を器用に動かし誰かに電
話をかけた。

「野村圭吾ですけど、失敗してしまいました。とだけ伝えとい
てください」と言う通話を切斷し闇の街へ消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4204b/>

人間シンドローム

2011年1月25日04時37分発行